

聖書: エステル記3章1～6節

説教: 王の命令に背く

はじめに

いまからおよそ二千五百年前、ペルシャ帝国の王であったクセルクセス王は、国中から姿の美しい女性を集め、その中から最も気に入った者を新しい王妃とすることにいたします。そのとき、候補者の一人として選ばれたのが、モルデカイが親戚から引き取って育てていたエステルで、その謙遜さが王の目に留まって王妃に選ばれてしまいます。

この王妃選びの騒ぎとは別に、ある一つの事件が起きました。二人の宦官が密かに結託してクセルクセス王を殺そうとしているとの情報を得たモルデカイは、エステルを通じて王に報告します。王はすぐに調査を命じたところ、モルデカイの言ったことが真実であったことがあきらかになり、二人の宦官は処刑され、これらの出来事は公式文書としてきちんと記録された。

エステルが王妃に選ばれたこと、モルデカイが王の暗殺計画を事前に防いだこと。一見何の関係もないこの二つの出来事は、後から振り返るといわずれも神のすばらしい備えであったことがわかります。何に対する備えであったか。きょうのところにあるようにハマンという人物がユダヤ人大虐殺計画を企てたことに対する備えであった。なぜハマンはこのような計画を考えたのか。なぜモルデカイはハマンに頭を下げようとしなかったのか。神はそのときどんな備えをしてくださっていたのか。そのことを見てまいります。

1 ハマンとモルデカイ

1) ハマンが王の側近となる

1節。「これらの出来事の後、クセルクセス王はアガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を彼とともにいる首長たちのだれよりも上に置いた。」

ペルシャ帝国は、七人の大臣で構成される内閣によって統治されています。その内閣の中も最も高い地位、すなわち王の最側近ということですが、王の抜擢によりハマンという人物が就く事になり、王は、誰であろうと彼に対して膝をかがめてひれ伏すようにと命令を出します。

2) モルデカイは膝をかがめない

それで、王の家来たちはハマンが通るたびに最敬礼をします。ところがモルデカイ一人だけ、膝をか

がめず、ひれ伏そうとしない。これは王の命令に背く重大は規律違反であると考えた家来たちは、このことをハマンに報告します。これを聞いたハマンは腹を立て、モルデカイ一人を処分するだけでは気が済まない。ペルシャ帝国に住むすべてのユダヤ人を根絶やしにしなければと決心する。このことがきっかけとなって、国中のユダヤ人は大変な恐怖の中に突き落とされてしまいます。

ここで疑問が二つ出てくる。一つは、どうしてモルデカイは王の命令に背いて、ハマンに敬礼しなかったのか。どんな理由であろうか、彼の反抗的な態度によって、他の何の関係もないユダヤ人に大きな迷惑が及んでしまったのです。モルデカイはこのことをどう説明するのか。二つ目。なぜハマンは、モルデカイ一人を処分するだけではおさまらず、ユダヤ人を根絶やしにしなければと考えるのか。よほどの事情があるはずです。

2 アガグ人とイスラエル

1) アマレク人の王アガグ (Iサムエル記15章8節)

このことを考える鍵は、ハマンがアガグ人であったところにあります。話しはサウルがイスラエルの王となった頃の時代に戻ります。祭司サムエルが、あるときサウルに「行ってアマレクを討ちなさい」と命じたのですが、それでサウルはどうしたかということ、「アマレク人の王アガグを生け捕りにし、その民のすべてを剣の刃で聖絶した。」と書かれている。

このことから、アガグ人というのは実はアマレク人のことだをわかる。まずこのことを押さえておきます。ではなぜサムエルは、アマレク人を徹底的に討てと命じたのか。

2) モーセの警告 (申命記25章17～19節)

話しはもっとさかのぼってモーセの時代のことで。モーセはイスラエルの民にこう警告していました。「覚えていなさい。あなたがたがエジプトから出て来たとき、その道中でアマレクがあなたにしたことを。彼らは神を恐れることなく、あなたが疲れて弱っているときに、道であなたに会い、あなたのうしろの落伍者をすべて切り倒したのである。(中略) あなたはアマレクの記憶を天の下から消し去らなければならない。このことを忘れてはならない。」

話しがいろいろな時代に飛んでしまったの、混乱したかも知れません。ひとことでまとめれば、アマレク人、アガグ人はイスラエルにひどいことをした敵であることを忘れるな、ということです。モルデカイが、ハマンに頭を下げなかったのは、ハマンがアガグ人であったためでした。

3) ハマンがユダヤ人を根絶やしにしようとする理由

ではハマンはユダヤ人のことをどう考えていたか。ハマンも自分の先祖たちがイスラエルとどのようないきさつがあったのかも当然聞かされていますから、ユダヤ人に対してふだんから敵意を抱いたでしょう。モルデカイは以前から自分がユダヤ民族に属すると公言していました。それでハマンはモルデカイが頭を下げないと聞いて、すべて理解する。ユダヤ人はモーセが語った警告をいまだに守ろうとしている。ということは、自分たちはユダヤ人の手で殺されるかもしれないという話になっていく。そんな危機感を抱いたハマンは、モルデカイのことを口実にしてこう決断する。「クセルクセスの王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民族を根絶やしにしようとした。」

3 主の命令に従う

1) たとえ王の命令に背いても

ここまで見てきて、いろいろな疑問を感じたのではないか。まずモルデカイに対する疑問です。モルデカイは、自分のしようとしていることが王の命令に背くのを知っていながら、モーセの口を通して語られた主のみことばに従うほうを選びました。もちろんそれは神の前で正しいことです。分からないのはその次です。モルデカイはハマンに憎まれようとも主に従ったことで満足だったかも知れない。でも、その結果、何の関係もないユダヤ人全体が恐怖に突き落とされていく。モルデカイがそのことを考えなかったとするなら、たんなる自己満足にではないか。

そしてもう一つは神に対する疑問です。モルデカイは、モーセが語ったら主のみことばに忠実に従いました。ならば神はモルデカイを祝福すべきではないか。ところがそれとはまったく反対に、ユダヤ人全体に恐怖を与え、モルデカイもエステルも苦しんでいく。なぜ神に従おうとする者に対してこのような仕打ちをなさるのですか。そんな疑問です。

これは、モルデカイだけではありません。私たちも同じような経験をします。お盆の季節になれば

お墓参りをし、仏壇を拜むこの世の中であって、そんなときクリスチャンは悩みます。私は、親戚の間では牧師だと知られていますから、仏壇を拜まなくても周りが気遣ってくれて、何も言われません。しかし、普通は違う。あるクリスチャンの女性に結婚するときに、お姑さんからこの家の嫁となる者は仏壇を拜んでくださいと言われて、大変悩んだという話しを聞いたことがあります。似たような経験は皆さん沢山しておられるでしょう。なにか悪いことをしようというのではありません。神に忠実に従おうとただけなのです。それなのに、どうしてこんなに苦しまなければならないのか。クリスチャンの誰もが持っている悩みです。

神はどのようなお方なのでしょう。信じる者に対し、真実をもって守り通そうとされる、それが私たちの神ではなかったのか。それなのに、モルデカイとエステルは、このハマンの企てによってこのあと、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされるような苦しみを味わわなければならないのです。

2) 神の備え

神のすべてのみこころが分かるわけではありません。でも、エステル記から教えられることがいくつかあります。確かに信仰者は苦しむことになる。それは避けられないことかも知れません。しかし、神はただそれを黙ってご覧になっているのではないのです。なぜエステルが王妃になるのか。なぜ、あるときモルデカイは王を殺そうとする計画を知って、王に告げることになったのか。そのときはなにもわからない。でも後から振り返ると、すべて神の備えであったことが分かる。ユダヤ人が救われるよう王に命令を出してくださいと願ったのは誰であったのか。王妃となったエステルでした。それができる人間は、あるときエステルしかなかった。ハマンのした悪事がすべてひっくり返るきっかけとなったのは何であったのか。モルデカイのしたことが王の年代記に記録されていたことによって、王がモルデカイのことを思い出したからです。もしこれらの一つでも欠けていたら、ユダヤ人は助からなかったでしょう。

ならばこう言えるのではないか。例え最悪のことが今目の前で起こったとしても、神は既にあらゆる備えをしてくださっている。神には決して手遅れはない。神を信じ、神に従おうとする者に、神はこのような助けをしてくださるのだ。

3) 十字架の備え

でも、苦しみのど真ん中に突き落とされていくとき、「神はきっと備えてくださいます」と言われても、どうでしょうか。まったく実感がない。絵空事にしか思えないのではないか。

では、神の備えはまったく見えない、わからないということなののでしょうか。いいえ、そんなことはありません。すでに確実に神の備えがなされている。イエス・キリストの十字架です。この方が私たちの罪の身代わりとなってさばきを受けたのですから、私たちはなにを恐れる必要があるのか。この方は、三日目に死からよみがえられたのですから、私たちは死を恐れる必要はない。言ってみればゲームの勝ち負けはゲームが始まる前から決まっている。神は、それほど強力な備えをしてくださっているのです。

もちろん、悲しみがある日突然向こうからやってくるかもしれません。でも、永遠に悲しむ必要はない。私たちは目を上げて十字架の備えを見ることができからです。備えてくださった主の御名をあがめます。